

# 街を記録する大田洋子

—『夕風の街と人—一九五三年の実態』論—

川口 隆行

はじめに

二〇一一年六月九日、村上春樹は、カタルーニャ国際賞受賞式において、戦後の日本社会がヒロシマ、ナガサキの体験を忘却し、「効率」「便宜」という価値観に無批判に追従した結果、フクシマが出来たのだという趣旨のスピーチを行った。「非現実的な夢想家」を標榜し、国境や文化を超えた、トランスナショナルな「精神のコミュニティ」を構想すべきと訴える姿勢に、それはさうだとうなづきもしたが、スピーチの端々に見え隠れする奇妙な歴史語りには、強い違和感を覚えたのもまた事実である。

広島にある原爆死没者慰霊碑にはこのような言葉が刻まれています。

「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから」  
素晴らしい言葉です。我々は被害者であると同時に、加害者でもある。そこにはそういう意味がこめられています。核とい

う圧倒的な力の前では、我々は誰しも被害者であり、また加害者でもあるのです。その力の脅威にさらされているという点においては、我々はすべて被害者でありますし、その力を引き出したという点においては、またその力の行使を防げなかったという点においては、我々はすべて加害者でもあります。

原爆投下の責任をあえて問わないといい、慰霊碑碑文をめぐつて続けられた論争の歴史にも一切触れずに、核の前ではみんな被害者であり、加害者であるという。

これは、いったい、六六年前の敗戦後に唱えられた一億総懺悔と、どこが違うというのか。このスピーチには、原爆投下の責任を追究する姿勢はむろんのこと、他者の責任の追究を通してそれをみずからの責任につなげようとする発想など生まれる余地はない。加害と被害が複雑な関係を切り結び結ぶ現実を直視することから人々を遠ざけ、すべての責任を雲散霧消することにさえ手を貸すだろう。それでは、「過ち」は、また「繰り返」される。

フクシマを語るにあたって呼び出された、あまりにも平板なヒロシマ・ナガサキの記憶。ヒロシマ・ナガサキとフクシマをつなげようとする思想的・文学的営為は、個別の歴史の位相を無視し、過去と現在の差異すらも消去してしまう、こうした平板な歴史語りによって実現されるはずはない。

一方、仙台在住の日本近代文学、比較文学研究者の佐野正人は、韓国のウェブマガジン『スユノモ』に掲載された、シン・ジョン（申知瑛）「3・11 이후 드러나는 우리들의 차이들」<sup>①</sup>に  
触発されたという文章をブログに綴っている。

3・11以後明らかになったのは、この「日本」に覆い隠すことのできない差異が書き込まれていて、その差異のあちら側とこちら側とは、被害の規模も感情も、そして情報も異なっているという実感だった。

東北地方は大きな被害を被ったが、その中にもさらに大小の差異が存在している。沿岸部と内陸部、都市部と農村・漁村部、在日外国人、移住労働者、原発被災地の避難民たち、等々。そういう差異を直視し、架橋しなければいけないのだが、マスコミにしてもわれわれの意識にしても、その差異を直視するほどに強靱ではない、というのが本当のところだろう。

しかし差異は存在している。そしてその差異の中に、悔しさや怒りや絶望が存在している。差異の構造を明らかにし、それを公然のものとしていく以外にその絶望から脱却する道はない。

東北の内に引かれた「差異」、東京の内に引かれた「差異」、それをいとも簡単にわれわれは忘れてしまう。「がんばれ日本」というスローガンの内に覆い隠されているのはそのような「差異」である。内国植民地としての東北、そこから流民として他地域に出て行った人たち、流民として流れてきた原発労働者たち、東北在住の朝鮮・韓国人たち、アイヌ人たち、そのような「差異」の線を無数に重ね合わせ、総合していくことの中にわれわれの希望は見えてくることだろうし、そこにしか3・11以後の東北地方が味わった悔しさと絶望とを癒していく道はないのである。<sup>(1)</sup>

佐野が言うように、やはり私もまた、3・11以後、日本というナショナルな空間のいたるところに、無数の差異が顕在化し、いまもなお、悔しさを憎しみ、そして絶望が示されていると感じられてならない。「差異の構造を明らかにし、それを公然のものとしていく以外にその絶望から脱却する道は」なく、「差異」の線を無数に重ね合わせ、総合していくことの中にわれわれの希望は見えてくる。おそらくそうであろう。では、差異を直視し、重ねあわせるとは、どのようなことなのか。いかにして差異を架橋し、希望としえるのだろうか。

こうした問いを私なりに引き受け、大田洋子『夕風の街と人』一九五三年の実態（大日本雄弁会講談社ミリオンプックス、一九五五年十月。以下『夕風の街と人』と表記）<sup>(2)</sup>を取り上げながら、できるだけ具体的に、いま、原爆文学とよばれるテクストを読む意義を考えたいというのが、本稿の大きな狙いである。

3・11によって、日本の戦後は終焉したという。そして震災、原発事故からの復興があらゆるところで唱えられている。巨大な暴力によって生じた傷は、やはりそれを癒す道を懸命に模索すべきである。だが、私たちは、「復興」という言葉によって自分たちが何をなそうとしているのか、どこまで自覚しているといえるのだろうか。いまさら繰り返すまでもないが、9・11以降、アメリカは対テロ戦争の美名のもと、アフガニスタン、イラクを攻撃、徹底した破壊の挙句に、厚顔無恥にも「復興」を唱えた。破壊者やその共犯者の責任は不問に付され、横行する「復興」ビジネスは、さらなる収奪に邁進した。「復興」を語る行為が、加害への加担を問はず回路を見失わせ、その言葉に孕まれた政治性もま

た問われない。そして、このような「復興」のモデルケースとして幾度となく持ち出されたのが、ヒロシマ・ナガサキの「成功」であった。いま、被災地で押し進められている「復興」とは、そうした醜悪な事態とは無縁であつてほしいし、またそうあらねばならないのだが、実際はどうなのか。

大田洋子は、一九五三年から五五年にかけて、ルポルタージュの手法を取り入れながら、「ほたる」（一九五三年）、「マッカーサー道路との対比」（一九五三年）、「残醜点々」（一九五四年）など平和都市建設、復興事業から取り残される街の人々を小説に描き続けた。『夕風の街と人』はその集大成といつてよい。『夕風の街と人』を考察の中心に据えるのは、それが、「復興」とはいかなるものか、いかなるものであつてはならないのか、といったことを、いまの私たちに問いかける喚起力を備えているとも考えるからである。

## 1 五〇年代前半大田洋子の周辺——「原爆文学」をめぐる諸相①

『夕風の街と人』の読解に入る前に、五〇年代前半の大田洋子とその周辺を、「原爆文学」というジャンル意識の形成と絡めながら、概括的にはあるが、整理しておきたい。

江口渙は、「原爆文学二つ」（『新日本文学』一九五二年二月）のなかで、大田洋子「城」（『群像』一九五一年一月）に触れ、『屍の街』『檻樓の列』とつぎつぎに力作をかいたせいか、さすがの原爆小説の自家本元も相当種ぎれのていに見える。もう一度広島にかえつてもっといい種を仕入れてくるんだな」ときき下ろした。江口の揶揄的な口調がよほど癪に障ったのか、大田は、「この」

ろは文学者が文学者らしくもないことを書くのが流行つていますが、こういう不謹慎なことをいう暇に自ら広島に出かけて裏町の隅々にどれだけの原子爆弾不具者が辛じて生きているか、一眼（ママ）見て来るといいのです。」と、感情をむき出しに応酬する（作家の態度）『近代文学』一九五二年七月）。大田の激しい反応に、江口は、「さすがの原爆ものも種ぎれのていに見える」などとあたかも原爆文学一般が種ぎれになったとは、この私はどこにもかいていない」、広島長崎にゆけば原爆文学の種は無限なのだ。大田洋子は早くからだをなおして元気になって、あのような文学の無限の宝庫の中へもつとふかく入りこんでいつてほしい」と応答した（大田洋子に答える）『近代文学』一九五三年三月）。

世にいう「大田洋子・江口渙論争」であるが、江口は大田の「城」については酷評するが、「原爆文学」一般を否定しているわけではない。論争の発端となった「原爆文学二つ」では、阿川弘之『管弦祭』を取り上げ、「この中で示されたような原爆被害の忠実にしてできるだけ正確を期した調査報告。その文学的表現。こういうものはいまのうちにできるだけ書いておかないと亡びるものであり、また、いくら書いても、これで沢山だというものではない。ことに原爆被害者としては世界で最初の国民である日本人として、その日本の作家としてこういうものを書くことは人類への一つの義務である」とさえ述べている。

江口が「原爆文学」を書くことを、「日本人」「日本の作家」としての「人類へのひとつの義務」と語つた頃、『文学界』の同人誌評（一九五二年九月）において、山本健吉が創刊間もない『広島文学』第二号を取り上げている。『広島文学』は、広島の新旧

の文化人、文学者が参加、諸文芸団体を糾合して設立した広島文学協会（一九五〇年一月〜一九五九年八月）の機関誌である。

山本は、梶山季之「族譜」に一定の評価を示しつつも、雑誌自体は「さぞかし『原爆文学』（変な言葉だが）にどつきりお目にかかれるに違いないという異郷の読者の期待に、見事に肩すかしを食はせた形だ。」「広島から出される雑誌としては、なにか一本クサビが抜けている感じがする。これではどこで出されたっていつうにかまわない雑誌だ。原爆否定を志向している土性骨のすわった面魂はここにはない。」と酷評した。中央からする「地方」の囲い込み、オリエンタリストまがいの視線が如実にあらわれている文章だが、それは、『広島文学』内部にくすぶっていた若い世代の不満を顕在化させ、世代交代を促すきっかけともなった。中央文壇の権威的発言を逆に利用するようにして、梶山季之をはじめとした兼川晋、小久保均、大牟田稔といった戦後文筆活動を開始した世代は、それまで雑誌編集の中心を占めていた戦前から活躍する旧世代に退場を迫ったのである。

ほどなく『広島文学』の実権を掌握した梶山たちは、「原爆文学」を雑誌の看板に掲げようと意気込んだ。第四号（一九五三年二月）には、原爆体験を題材とした稲田美穂子「見知られぬ旅」を掲載、この作品は『中国新聞』で細田民樹や斎木寿夫に激賞された。同号にはこれまでクローズでおこなっていた「原爆の文学研究会」を公開すること、「原爆の文学」公募企画を構想していることを記載する。第五号（一九五三年三月）では、実際に「原爆の文学」作品募集規定を掲載しているのだが、同月の『文学界』の特集は「原爆時代と文学」であり、明らかに『広島文学』は、

中央の文壇と歩調を合わせようとしていた。ところが、こうした『広島文学』の目論見は、梶山の突然の上京（一九五三年四月）によって挫折、作品募集の話も立ち消えとなった。

この時期、広島では、『中国新聞』（夕刊）誌上を舞台にした「第一次原爆文学論争」が展開されてもいた。

直接の発端は、志條みよ子「原爆文学」について（二月二三日）の掲載であった。「原子爆弾という名前の下に、努めて文学の二字を加えたり、ましてや芸術などという至高の言葉をそういつまでも付け加えたりしては困る。」といった「原爆文学否定論」と呼ぶべき志條の文章に対し、筒井重夫「原爆文学」への反省（二月三日）が反論を試みたのを皮切りとして、多くの広島文学者、文化人が論争に参戦、以降四月初旬まで「原爆文学」についての発言が賑々しく繰り返られていった。<sup>(4)</sup>

四月に入って、稲田美穂子、小久保均、斎木寿夫、真川淳、志條みよ子、筒井重夫といった広島在住の文学者たちに、『魔の遺産』の取材のために帰郷していた阿川弘之を加え、座談会「原爆文学の行く手を探る」（四月一七日、一八、一九）が開催された。

座談会は、志條が実は被爆者（入市被爆者）であったことが自身の口からあかさされたこともあって、彼女に批判的だった面々の矛先が鈍り、結局取りまとめ役となった阿川が「理屈よりもまず書くことですね」といった趣旨の発言をし、今後の広島文学活動に期待するといった雰囲気では結ばれた。

この座談会には、先に述べた参加者のほかに、中国新聞学芸部長と学芸部記者であった金井利博が列席しており、学芸部長の口から「原爆文学」公募が話題にされている。この公募こそが、先

に述べた『広島文学』がもくろんだ企画にはかならない。

従来、さほど関連づけてとらえられてこなかったが、『広島文学』の動向と「第一次原爆文学論争」は別個のものともみるべきではない。すでに天瀬裕康は、「志條みよ子の発言にしても、金井利博記者から、若い連中が「原爆の文学研究会」をやっているが、なにか書いてやってほしい、と頼まれたのが切っ掛け」であり、「論争に加わった人びとの相当数が『広島文学』の同人だから、梶山が仕掛け人だったと考えてよいだろう」という重要な指摘をしている。梶山と金井が、一九五一年に「原民喜詩碑建設広島委員会設立協議会」の事務局を二人で切り盛りして以来、年の差を超えた同志的結びつきの間柄であったことを考えても、天瀬の指摘は信憑性が高い。

## 2 五〇年代前半大田洋子の周辺——「原爆文学」をめぐる諸相②

一九五二年後半から五三年前半にかけての広島文壇、ジャーナリズムの動きから確認できるのは、世代間闘争や文学観の対立とも連動しつつ、中央文壇の期待を引き受けた、自己イメージとしての「原爆文学」という枠組みが、しだいにせりあがってくる様相である。ただし、ローカル文学、郷土文学としての「原爆文学」に関する言説は、微妙にその姿を変容させながら、再度、中央の言説に還流しているようである。

小久保均「再び「原爆文学」について」（『中国新聞』一九五三年二月四日）は、「第一次原爆文学論争」における、原爆文学の定義、方法論に踏み込んだ数少ない文章という評価を得てきた。

この当時、小久保は『広島文学』同人であり、梶山や金井と親しく交流していた。

小久保は、「原爆の悲惨を自然発生的手法」で書いた「第一次原爆文学」と、それを踏まえつつも、「現代世界の根源に横わる矛盾の核心」に「真向から肉薄しようとする」ような「第二次原爆文学」といった具合に、「原爆文学」を二段階のものとして把握するよう提唱した。

真に人間を愛する、人間の復活を願う、野心ある運動が起つて来るのは当然である。この運動はその根底にすでに人間に對して真切行為しかない政治と科学を再び人間に從属せしめようという意欲を持つている。政治と科学を、かつてそうであったように、人間の福祉をひたすら増進するためのものに作りと直そう考えているのである。そしてこの運動の一環を担うのがいわゆる原爆文学なるものである。（中略）原爆文学とは原爆を意識的契機として生まれ原爆にかかわる過去、現在、未来の一切の問題を人間との関連において深く考えようとする文学である。

「原爆を意識的契機として生まれ原爆にかかわる過去、現在、未来の一切の問題を人間との関連において深く考えようとする文学」とされる「第二次原爆文学」とは、実際にはまだ存在しない、未来において登場が期待されたものである。

ジョン・トリートは、小久保の議論について、「伝統的に親しみやすく人間的な領域に取り込むことで、原爆を馴染み深いもの

にする」ものだとし、それは「文学は「人生そのもの」を扱うべきだと主張するライバル志条の論理を皮肉にも再生産してしまっている」といった、興味深い指摘をしている<sup>7)</sup>。原爆投下といふこれまででない規模と質の出来事が不可避に要請してしまう表象(不)可能性の問題に思いが及ばず、従来の人間観、文学観の枠を超えていないというのだ。小久保に「未来への楽天主義」を見いだすトリートは、同様のことを小田切秀雄「原子力問題と文学」(『改造』一九五四年二月)にも指摘する。

小田切はこの評論において、「ピキニの灰」以前の体験者による報告的文学を便宜的に「原爆文学」と呼ばれているとして、その価値を認めつつも、もはやそれでは不十分であり、原子力の破壊的機能の巨大化を把握し、それを平和利用の未来へと転換しえるような新たな文学方法―具体的にはシュールリアリズムなどの導入―の必要を唱えた。

原子力の平和利用の可能性とその部分的実現との現状は、この文学の発展に新しい展望と活気を支度している。原水爆戦争によって文学をふくめてすべてが無に帰してしまわないかぎり、このことは絵そらごとには終わらないだろう。人類史の新しい段階は文学史の新しい段階にならずにはいけないのである。

小田切が、「核」の登場に対応するような表現形式をひとまず意識的に模索しようとしていることは、押さえたほうがよい。それは小久保が漠然としか提唱できなかった「第二次原爆文学」とい

う言葉の位置に、「原子力時代の文学」というそれなりに具体的な内容を補填させるものであった。とはいえ、核戦争による世界の終焉には一応言及しつつも、原子力の平和利用の可能性と文学の未来を夢見る小田切の主張は、3・11を経た現在、やはり牧歌的な印象はぬぐい難い。やはり小田切は、現在の延長としての未来の到来を、さほど疑ってないかのようだ。

トリートは、小田切について、もうひとつ重要な批判をしている。「原子爆弾を開発したプロセスが社会の発展をもたらすという歴史的未来を構想することで、不正にもたらされた最初の不幸な暴力「原爆」を正当化し、少なくともその埋め合わせをする」「原爆文学の争点は、実際に起こった二つの歴史的事件の詳細やその責任をめぐめるものから、可能性を秘め、また慰めともなり得る未定形未来についての、実際の犠牲者や加害者抜き議論へと転換させられてしまう<sup>8)</sup>。というのだ。ヒロシマ・ナガサキの歴史的絶対性を過度に強調するトリートの論法は、「原爆文学」の領域を狭く固定化する危うさを感じさせなくはないのだが、やはり「実際の犠牲者や加害者抜きの議論」への転換といった問題は、相応に考慮すべきであろう。

小田切の議論を受けて展開された花田清輝「原子時代の芸術」(『世界文化年鑑・一九五五』一九五五年三月。のちに「原子力問題に対決する芸術」と改題のうえ、小田切秀雄編『原子力と文学』講談社、一九五五・八に収録)は、阿川弘之『魔の遺産』(一九五四年)、大田洋子『半人間』(一九五四年)、『夕風の街と人』を挙げて、「いずれも原爆の直接の被害者たちの生霊の精細な報告であり、繰り返すまでもなく、それにはそれなりの存在理由がないとはいえない

いが、依然として、私小説、心境小説の手法で描かれて「いるため、「つねにその事実、作者の道徳的価値判断の基準たるや、厳密な意味での記録文学と称しがたいことは言うまでもない」と酷評する。連載中であつた『夕風の街と人と』については、「戦後十年近く過ぎてしまつた現在、スラム街に住んでいる市民たちの不幸の原因を、さまざま中間項をとびこえて、いきなり原爆とむすびつけてしか考えられないような精神状態では、もはやこの作家に、事実の客観的報告は期待できない。」と、作家としての存在意義を全否定するような、辛らつな評価を下している。

話はいささか前後するが、梶山上京後、混乱する『広島文学』のリーダーに担ぎ出されたのが、戦前プロレタリア作家同盟に参加していた田辺耕一郎であつた。編集発行人となつた田辺は、官界、財界、学界の有力者をスポンサーにして財政難に苦しんでいた『広島文学』の立て直しに尽力する。『広島文学』一九五四年九月号には、「原爆障害者の実態」という座談会記事が掲載されるのだが、このあたりから『広島文学』は、「一地方の文学活動にととまらない、世界注目の広島における新しい文学運動」を標榜、高まりを見せていた全国的な原水禁運動に積極的に随伴しようする。広島では同年五月に原水禁広島大会、翌一九五五年八月には第一回原水爆禁止世界大会が開催されている。

田辺は、「原爆と文学」(『文学』一九五四年二月)において、やはり大田と阿川の作品をとり挙げ、「現地の生きた現実から浮いている」「原爆の文学をして、望みなき虚無感に導くことにしかなつていない」と強い口調で批判、「プロテストや復讐心」ではなく「大きな罪悪が繰り返されてはならないというヒューマニズム」「原水

爆禁止の叫び」の必要を主張した。大田や阿川の作品を、「望みなき虚無感」をもたらすだけで、「プロテストや復讐心」は無用と言つてしまえる田辺は、小久保や、小田切、花田といった面々以上に、「未来への楽天主義」を深く内面化した人物であつた。

五〇年代前半の言説状況の一断面を整理したにすぎないのだが、ここで確認すべきは、未来の「原爆文学」——花田の言葉でいえば「原子力時代の芸術」——を標榜する言説圏が形成される過程において、大田洋子は、否定の対象、乗り越えるべき過去の遺物の代表とされつつあつた、ということである。小久保や田辺のような素朴なヒューマニズムに依拠し、原水禁運動にコミットしようとする立場と、小田切や花田のような文明的視座を含みこみながら、原子力と芸術論を突き詰めようとする立場では、かなり開きもあるだろう。特に花田が展開した「記録芸術」論と原爆あるいは原子力との関係については、より包括的かつ詳細な検討を別途用意しなければならぬのだが、中央と広島から発せられる未来志向の言説に挟み撃ちにされようとした、まさにそうした時期に、連載、発表されたのが『夕風の街と人と』であつた。

### 3 「復興」を問いなおす「声」

『夕風の街と人と』の主人公は、大田自身がモデルとなつた、被爆体験をもつ作家の小田篤子である。五三年夏に広島島の街に帰郷した小田が、母と妹が住む基町の被災者住宅に宿泊まりし、隣接する相生土手のスラム街に通いながら、街の実態を小説にしようと試みる姿を描いている。主な舞台となる基町住宅、相生土手

のバラック街は、一般にはひとまとまりのものとして「基町バラック」「原爆スラム」と呼ばれた、やはり実際の広島市内に存在した場所である

この時期、広島では「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を広島平和記念都市として建設する（第一条）」「都市計画の外、恒久の平和を記念すべき施設その他平和記念都市にふさわしい文化施設の計画を含む（第二条）」といった、広島平和都市建設法という法律を根拠に、急速な「復興」が推し進められていた。すべてとは言わないが、「復興」という言葉の響きには、失ったものをすべて元の通りに回復しえるという信頼ばかりか、かつてあったよりもよりよき状態を構築しえるのだといった「未来への楽天主義」が存在しているようだ。しかしながら、『夕風の街と人』は、そのような「未来への楽天主義」から遠く隔てられている。小説に書きこまれた複数の声は、そうした「復興」のありように、激しい違和感をつきつける。

「この街では片カナでヒロシマと書く『ヒロシマ』が出来つつあるんで、復興ではない——」

「そう。私もそう思うんですよ。復興とは別なものです。ヒロシマという字はいやな字だわ」（12）

「復興都市建設法の埒外に、いかに多くの人間がはみ出しても、いかに多くの人間群がはみだしてもいいですよ、マッカーサーは、ワンダフルと云ってね、大賛成でした」稲木は小さい声で云って、からからと笑いだした。彼は酒を飲んでい

た。内緒話のように声を低め、

「昭和二十四年に、平和都市建設法をつくって、N市の文化都市建設法との両方に、年額、一億一千万の予算をわけてくれたんですよ。そのときがワンダフルでね、国会議長は、マッカーサーに記念演説をやれというさわざです。H市復興を祝福しなくてはならんから、この道路に、マッカーサー道路という呼び名をつけた。一億一千万をなにに使ったかと思えますか。平和記念館、平和大橋、公園緑地帯——」（29）

公園や道路といったインフラの整備は、平和都市建設法が実現しようとする片仮名のヒロシマを可視化させるものにはかならないが、「復興」批判の声の多くは、篤子によって「失人間」と名付けられた人々から発せられた声である。「失人間」とは、法の体系から排除されることで、いつさいの権力を剥奪された、ただただ「剥き出しの生」（ジオルジュ・アガンベン）を生きる状態に、転落させられた者の謂いであろう。

篤子は漸く気づきはじめていた。みんな壊れている。一人のこらず壊れているのだ。人間の権利をうしなない、そして肉体をも魂をもうしなつた「失人間」ともいうべきものだと思つた。篤子は己れもそのなかの一人だという自覚をとくから持つていた筈であつた。それでなければこの堤防に連日憑かれたような姿でやつてくることはなかつたと思つた。

（中略）人間としての完全な機能を失つた者たちが、「失人間」としての新しい階層となつて、こんにちうごめいている



のだった(6)

基町とりわけ土手の住人の多くは日雇い労働者である。「復興」の埒外に追いやられつつも、「法」を可視化させる公園や道路建設に従事している。「都市計画者にとって、「原爆スラム」とは、将来解体されるべき場所であるにせよ、復興事業に欠かせない安価でフレキシブルな労働力のまとまった供給地でもあった」のであり<sup>(6)</sup>、「失人間」は、「復興」から排除されつつ、労働力として包摂されている。

さて、みずからを「失人間」という篤子は、土手の「失人間」の群れに引き寄せられるようにして街をめぐっていくのだが、小説冒頭近くに彼女が相生土手に向かうシーンが描かれている

三年前すでに、いまのように、堤防いちめん小バラックがばらまかれる徴候が見えていた。堤防の入口は、市の中心の繁華街に近かつた。相生橋のたもとから入ってくるのである。三年前はその繁華街にちかい入口の土手際にだけ、ごたごたとした家が乱雑に並んでいた。朝鮮人ばかりであった。日本人が交つていても、何らかの関係を朝鮮人とのかいだにもつた日本人たちばかりのようだった。基町住宅に住む者が、みずばらしいその盆地から、他の町に出る場合、繁華街にゆくてでなくても、朝鮮人の住む土手の端の坂をのぼつてゆかなくはならなかつた。三年まえ、篤子はたびたびそこを通つた。朝鮮人の家のなかは丸見えであつた。表は河に向き、裏は兵營の壊滅のあとに建つた基町住宅に向いた家のなかで、

彼等は朝も昼も酒をのんでいた。牛乳色をした濁色の一升びんがどの家にもならべてあつた。見る見るうちに、濁酒の瓶が次々とからになつてゆく有様を、篤子に想像させた。彼等は日本の着物をだらしなく着、篤子がいつ通つて見ても、酒をのみ、麻雀をし、騒ぎ立てていた。秩序はなく、乱脈だけがあつた。朝鮮動乱が強烈の度あいを深めていた。篤子は朝鮮人たちが、北の人か南の人かと思つた。危懼の思いで、その人たちの顔を見たいと考えたが、まともに見ることはできなかった。彼等の方でも自分の家を覗きこむ日本人の誰をもふり向こうとしていないのだ。篤子にはある思い出があつた。戦争の終結したあと、ついその相生橋のうえで、朝鮮人たちがまみれるように乗つた数台のトラックと出会つた。旗と幟とプラカードを押し立てて、彼等はせつかに、

「朝鮮独立万歳！」と強く叫んでいたのだ。

「ほんとに独立できるとおもつているの？」

心のなかで篤子はそう思い、涙ぐんだ。のちになつても、このときの瞬間的な光景をわすれず、胸の底に涙が残つているのをかんじた(1)

三年前に同じ場所を通つた際に存在した朝鮮人部落が想起されている。篤子の意識は、朝鮮戦争停戦直後の現在から、一九五〇年の「朝鮮動乱が強烈の度あいを深めていた」頃へ向かつている。さらにそれは、四五年夏の日本の敗戦時の記憶へと遡つて行く。相生土手入口にあつた朝鮮人部落は、五三年の時点では消滅しているのだが、朝鮮人がこの街から立ち去つたことを意味しない。

むしろその逆である。篤子は日本の学徒兵から「八路軍」に入りその後日本人と結婚し、朝鮮戦争のさなかに密入国してきた金という人物から話をきいたり、「肩のあつくもりあがつた」労務者の朝鮮人と出会ったりと、朝鮮人は相生土手一带に拡大したスラム街全体に散って行ったのだ。

篤子はまだ日本が中国を侵略していたころの戦争中、二三度もそこを旅行をしたが、その革命前支那の裏町という裏町に、この土手の不潔にそっくり似た、底知れない不潔があるのを見た。よく似てきたと彼女は思った。似ているけれども同じではない。この土手の不潔の歴史は浅かった。原子爆弾の前日まで、この堤防は軍隊のものではあつたが、芝生と花の遊歩道路のようであつた。(9)

過去の戦争の記憶が蘇ると同時に、現在の相生土手のスラム街と、日本が侵略している中国の裏町とが、「不潔」という言葉によつて重ねられる。それは先の引用で、「秩序はなく、乱脈だけがあつた」と朝鮮人部落を想起し、さらには朝鮮独立万歳を叫ぶ朝鮮人に対して「ほんとに独立できるとおもっているの?」と心のなかで思い、涙ぐむ姿ともどこか通じるだろう<sup>(10)</sup>。

良心的な戦後の価値からすれば、或る意味不穏な情動の出来ともいえる。だが、それは決して表層の差別性において批判されてよいのではない。むしろこうした情動は、「失人間」をその埒外に放擲して「復興」する、「国際平和都市」の論理にすでに内包されたものであつたと考えるべきである。否認、抑圧しようとし

た情動の回帰。「失人間」の集うスラム街をたどることで想起される戦争の記憶と情動は、「国際平和都市」という戦後広島のアイデンティティに、鋭い亀裂を生じさせる。

ちなみに、『夕風の街と人』の「原爆スラム」には、被爆体験者以外に、東大農学部出身で、満洲の開拓団からの引揚者である稲木という人物や、「奉天の朝日町では、小児科の医者のお妻だつた」「四十歳にちかい」「引揚の女」など、引き揚げとくに満洲の存在が色濃く描きこまれている。川村湊は、「浜井市長が「新京」の都市計画の影響を受けたり、戦後の初代市長である木原七郎が「満洲国」の共和会出身だったり、元「満映」の看板スター李香蘭こと山口淑子が慰霊碑のデザインに関与したりと、戦後の「平和都市・ヒロシマ」と「満洲」との関わりが見え隠れする」と、五族共和・王道樂土の帝都「新京」と「ヒロシマ」の連続性、親近性を指摘している<sup>(11)</sup>。精査が必要だとしても、魅力的な仮説であるように思われる。確かにいくつかの記録、証言からは、広島<sup>(12)</sup>の「復興」の中心を担った都市計画者たちと満洲の関係がうかがえる<sup>(13)</sup>。戦後日本の「復興」計画を立案した戦後復興院(一九四五年一〇月発足)が、旧植民地経営を担った戦前の革新官僚を中心としていたことを考えれば、むしろそれは当然のことであつたとも思われる。「原爆スラム」に刻まれた満洲の表象は、「平和都市」という名前に回収できない剰余といつてもよいかもしれない。

こうした戦前・戦中の記憶の回帰は、「戦後」と呼ばれる時代認識それ自体の自明性を再審させることになる。

「今日あの百メーター道路を歩いて見て、つくづく妙な道路だと思つたの。みんなが軍用道路だと云つていのがわかる気がしたんだけど、なにかそうだと云えるものがあるのかしら」

「将来の兵たん基地だということは、考えられるでしょう」

「確証と云つたものがあるのですか」

学生は篤子と同じ程度に緊張した顔をしていた。

「それは全然ないとは云えません。現在のままで、基地の格好はしていませんが、あの道路はいま、比治山下からいきなり出て、己斐まで行つてるきりですけど、比治山下は八本松と呉へつながります。E島に米軍キャンプがあつて、Kが英濠軍司令部であることは、誰でも知つてはいる通りです。Eに火薬庫、第三管区保安隊。あの道路は、どこまでだつてひき延ばすことができます——。八本松にも火薬庫があります。そこから下つた南のH村に陸軍の練習場があつて、あそこ松茸がとれなくなつた損害が百万円だそうです——己斐からは岩国へのびることができません」

——（中略）——

「宇品の港から、朝鮮へ水をたくさん送つたんです。水そのものは、戦争に使われているものでなく、水がいくら作られても、戦争のためというものはいけません。しかし朝鮮の戦争で使われているとすれば、軍需的、兵たん物資であるという意味で、この市の広い道路がある意味をもつて、解釈することが、可能でなくはないのです。百メーター道路は、僕たちの望むように、平和道路ともなり得ますが、軍事道路ともなり得ます」（18）

篤子と「原爆友の会」の青年との会話の一節である<sup>(14)</sup>。「百メーター道路」は、「軍事道路」にほかならないという認識を梃子にして、「平和都市」としての「復興」は、「軍都」の再演として、その意味を書き換えられる。本来に軍用を目的として建設されたのか、といった点が大切なのではない。「原爆友の会」の青年がいうように、そのように解釈、想像する可能性が提示されることによつて、現在に至るまで続く「国際平和都市」というイメージが揺さぶられてしまう点が重要なのだ。このように『夕風の街と人と』は、法体系内で声を奪われた「失人間」たちの「声」を拾い集めることで、「国際平和都市」としての「復興」の無根拠性を露呈させるのだ。

#### 4 不和・不台意の表象としての「夕風の街」

『夕風の街と人と』のなかで、「原爆友の会」の女教員が篤子に「ルポルタージュ」を書くのかといった質問をする箇所がある。篤子はその質問には正面から答えず、次のように返事をする。

「この街では気色の悪いことだらけだわ。みんな好き勝手なことを云つてて、一つとしてまとまつた、本筋のようなものはないでしょう。結果的にもし私がこの街を書くとしても、本筋は原爆なんだから、原爆という、文学の範疇からはるかに遠いものを、文学のなかに持つて来ようとするんだもの。相手があれだけでつかい、悪魔的なものでしょう？ 荒けずりにパッパッとやつてゆくほかないのよ」（19）

ここで篤子がまず言おうとしているのは、無秩序でとらえどころのない「この街」の「実態」に「本筋」を与えるのは、自分の個人的動機でもある「原爆」であるということだ。そもそも篤子は、「不安神経症の入院治療という、半ば殺されたような、不透明で、閉ざされた神経の世界から、広い場所に出て、自分を再形成したい希みを抱」いて、「日市という原爆投下<sup>（18）</sup>に遭遇した都市に来た」の主体回復への希求があった。その点に置いて、自己再形成と街を書く行為は等しい。

しかしながら、「一つとしてまとまった、本筋のようなものはありません」バラバラの街の「実態」を、自己の欲望にしたがって一義的に整理し、継ぎ目のない全体として現前化させようとする行為と、「復興」という大きな物語<sup>（19）</sup>で街を覆い尽くすことは、どこが違うのだろうか。

● 同じ日、同じ時間に巨大な戦禍によつて傷ついた者という意味で、まつたく貧民街の連中と同じ呼吸をしていた。（2）

● 歩きまわつて接触した、あらゆる実態を、作品のなかに解放し、作者である自分は、行動をくづらせてしまいたいと篤子は思っていた。しかし、そうはいかない。この思いは、己も土手の「者」と同じ様に、原子爆弾による放射能を浴びせられた人間だという意味で、同じ位置にいるということから来ているようであった。自分の場合、作品のなかをさえも、作者が歩かなくてはならないと彼女は考えるようになった。（1—1）

篤子はスラム街の住人と自分を、「同じ日、同じ時間に巨大な戦禍によつて傷ついた者」であり、「原子爆弾による放射能を浴びせられた人間だ」という意味で同じ位置にいる」と語っている。だが、先述したように、外地からの引き揚げ者を含め、「同じ日、同じ時間」を共有しない、少なくとも一九四五年八月には「放射能を浴びせられ」なかった多くの「失人間」に、篤子は出会ってきたはずではないか。

ここで思い出したいのは、第二節で紹介した花田清輝の言葉である。花田は、『夕風の街と人』を評して、「戦後十年近くすぎってしまった現在、スラム街に住んでいる市民たちの不幸の原因を、さまざまなかんじをとりこえて、いきなり原爆とむすびつけてしか考えられない」と批判したが、このような箇所を念頭においてなされたものだと思えば、それはそれで納得しなくはない。

『夕風の街と人』は、全部で三十章からなるが、本節のはじめに言及した篤子の発言は、第十九章に登場する。この発言以降、篤子は、基町や相生土手のスラム街よりも、市の中心部に出かけることが多くなり、小説の話題は本格化してきた被爆者検診、そしてアメリカを訴える原爆裁判の話へと焦点を移していく。

被爆者救済の健康診断、原爆裁判といった出来事は、やはり実際の一九五三年当時の出来事と対応している。しかし、少し見方を変えてみれば、こうした小説の展開は、『夕風の街と人』が執筆、発表された五四年から五五年の動向ともびたりと対応する。前節でふれたように、この小説の冒頭近くには、朝鮮戦争時に存在した朝鮮人部落の跡地を訪れる描写があった。混沌としたスラ

ム街の出来事から、被爆者救済運動、そして原爆裁判、というプロットの流れは、朝鮮戦争から、第五福竜丸事件を経て、全国的な原水禁運動の昂揚へと向かう、現実のプロセスとも重なるようにも読めるのだ。この小説の「一九五三年の実態」とは、五四年、五五年の実態でもあるのではないか。

第二四、二五章では、基町バラックの移住、解体を熱望する篤子の姿が描かれる。登場人物の次元でいえば、篤子はスラム街の住民救済を目的しているわけでその善意は疑えない。だが、いささかうがった見方かもしれないが、この時点でのスラム街の解体の希求は、一般的な意味での「原爆」という言葉に収斂させ難い「失人間」のうごめく「夕風の街」を、完全に消滅させてしまいたい、そんな欲望の発露のようにも思われてならない。

このように考えると、この小説は、「気色の悪いことだらけ」で「みんな好き勝手な」「この街」に、自分の都合で「本筋」を与えてしまう、すなわち篤子による「この街」の領有を正当化しようとした小説ということになるのだが、そうとは必ずしも言い切れないのではないか。

近年、『夕風の街と人』について、「実地探訪を重ね、個別的な体験を収集しながらそれをルポルタージュ（記録・報告）のように記述しようとする、被爆した作家の物語を書くという方法」を指摘する中野和典<sup>(15)</sup>や、「実態」を描く作者が作品内に登場し、自身の書き方について深く言及されているため、小説の（小説らしき）を問う、一種のメタフィクションとしても読むことができ「とする楠田剛士<sup>(16)</sup>のように、この小説に描きこまれた、作家の位置に注目する議論が登場している。

中野や楠田の議論の重要な点は、小説内部に自己言及的に書き込まれた作家のポジションを、どのように評価すべきかといった課題を提出したことであろう。

●あの土手を見にきたのだと篤子は思った、見るためではなかった。こんどこそはあんなに溶けこんでしまいたい思いがあつた。欲望に似ていた。(1)

●この人々と同じ生活はしていないし、ここで観察される者ではなく、観察しようとしている人間であつた。充分な時間をかけなければ、その人たちと溶け合うことは不可能にちがいないのだ。日本の作家の誰か一人が、護岸の草原に不法の小屋を建てて住む。それは誰であつてもよいと篤子は思った。(15)

篤子は「土手を見にきた」といいつつ、だが即座に「見るためではなかった」「溶けこんでしまいたい」と思う。自分が観察者つまり取材者であることを意識しながらも、観察の対象と同一化したいという。大田の「屍の街」（一九四八年）には、「人間の眼と作家の眼で見ている」といった一節があるが、それは原爆の当事者、すなわち主体であると同時に、それを書く客体でもあるといった分裂を示している。『夕風の街と人』においても、こうした分裂した作家の位置が書き込まれているといつてよい。篤子は、引き裂かれた状態を何とか埋めようとするからこそ、性急に、「同じ日、同じ時間に巨大な戦禍によって傷ついた者」「原子爆弾による放射能を浴びせられた人」とスラム街に住む人間を同定し、同化しようとするのだ。しかしながら、そうした分裂した作家の位置の書き込みは、

読者に、彼女の観察者＝取材者としての客観性、中立性を批判的にとらえ返させ、彼女が記録しようとする「この街」の「実態」といったものを、やはり問いなおさせるにちがいない。

こうした視点から、先に触れた篤子の言葉をもう一度読み直してみるとどうなるか。

「この街では気色の悪いことだらけだわ。みんな好き勝手なことを云つて、一つとしてまとまつた、本筋のようなものはない。りはしないでしょう。結果的にもし私がこの街を書くとしても、本筋は原爆なんだから、原爆という、文学の範疇からはるかに遠いものを、文学のなかに持つて来ようとするんだもの。相手があれだけでつかい、悪魔的なものでしょう？ 荒けずりにパッパッとやつてゆくほかないのよ」(19)

「原爆」という「本筋」を導入し、「この街」の「実態」を領有しようとする行為は、そのためには、「荒けずりにパッパッとやつてゆくほかない」。そうすることでは、「原爆」という「悪魔的なもの」を「文学」の領分に回収することはできないともいう。だが、それはすなわち、みずから書くこととする「この街」の記録には、その「荒けずり」さゆえの隙間が必然的に存在してしまうことを示唆しているともいえるのだ。その隙間こそが、街を記録するという行為に、読者が批判的に介入するために与えられた契機と見るべきなのだ。そうした隙間に分け入ることで、『夕風の街と人』という小説が、「原爆」を書くという行為——端的にいえば「原爆文学」を生み出す行為——すら、問い直そうと試みた「原爆小説」であつ

たことに、読者は気付かざるをえない。たとえば、次のような個所も、そうしたこの小説の隙間のひとつである。

「いつたい引揚者のなめた苦勞と、原爆にやられたひととは、どつちがよけい悲惨でしょうかねえ。この街では原爆にあつた人らが、自分たちこそは世界中でいばげん残酷な目にあつたような顔をして、いばつてるんですからね」

「いばつてはいませんよ」

篤子は相手をなぐさめたかつた。

「いばるところか、なんにも云わないで、だまつていますよ。もつと云わなくてはならないわ。わすれたみたいな顔をして、黙りすぎていると思うのよ。この街の人が云わないで、誰が云つてくれるの」

「引揚者にだつて、いうことはありませんよ。満洲の奥地にいた人たちは、じぶんの親や子供を、たべるものはないし、足手まといにはなるし、殺して逃げてきた人も大ぜいいるんですからね。逃げる途中で歩けなくなつた子を次々、しめ殺したり、病気になつた親を捨てて、自分ひとりだけ逃げてきたりした人も多いいんですからね。これだつて悲惨です」

ここでもまた篤子は愕然とした。前にもいく度となくどこかできいた経験のある話だつたが、はじめてきくようにおどろくのだ。原子爆弾と引揚との悲惨の質について、女ともつと話したかつた。同じ戦争の悲惨にちがいないが、質はちがつた。そのような話をこの女とのあいだに押し進めるためには、女からの霧囲気が、それを拒んだ。女からの線がくずれすぎて

いる。もう一度来たいと云つて篤子は外に出た。こんどはその女が、土手の入口界わいをいつしよに歩いた。(3)

篤子と「奉天の朝日町では、小児科の医者の子だつた」「四十歳にちかい」「引揚の女」との対話である。この女性、原爆へと話を焦点化していく第20章で、「十六歳の女の子を学校に通わせ、自分は売春宿へ客引きに行つてゐる彼女は、土手で篤子と出会がしらにばつたり会つても、ちかごろでは知らぬ顔をしてゐた。」と描かれたのを最後に、小説の表舞台からは消えてしまふ。「いつたい引揚者のなめた苦勞と、原爆にやられたひとらとは、どつちがよけい悲惨でしょうかねえ。この街では原爆にあつた人らが、自分たちこそは世界中でいちばん残酷な目にあつたような顔をして、いばつてるんですからね」「引き揚げ女」のこの言葉が、もつともであるなどと言いたいのではない。「同じ日、同じ時間に巨大な戦禍によつて傷ついた者」「原子爆弾による放射能を浴びせられた人」ではない他者の言葉に、篤子は「愕然とし、「はじめてきくようにおどろく」。その驚きは、たとえ瞬間であるにせよ、「原爆文学」として「この街」を記録しようとする篤子の意識に亀裂を走らせるだろう。そして、篤子の自己形成(≡主体化)の欲望に寄り添つて、この小説の「本筋」を「原爆」なのだ決めてかかつた読者は、篤子のポジションに注目することによつて、みずからの意識を攪乱させてしまはずだ。

『夕風の街と人と』は、原爆投下を決定したトルーマン元大統領、マンハッタン計画の指導者、B29の搭乗者を、アメリカの最高裁判所に訴えようと奔走する楠山弁護士と篤子とのやりとり

で結ばれる。

「この街にわたしが度々やつてきて、夕風の暑いなかを、原爆傷害者に会つていろいろききましたかね、その人らが大阪の私のところへ手紙を書いてよこす。原爆孤児の手紙を、夜中に寝床のなかでよんでいると、涙がでてしようがなくてね。あんたも熱心によつてるそうだが——」(中略)

楠山氏の話は無限につづきそうに思えた。細い眼がかがやき、頬が紅潮していた、雷鳴は遠のいたが、ひらいてある窓を雨のしづきが打ちはじめた。篤子はまだ顔をあげなかつた。楠山氏の情熱の照り返しのためと、自覚されたある歓喜に似たもののために、彼女の胸は高く鳴つていた。完全な救いではないが、その片鱗にふれた気が篤子はした。楠山氏の話しに、希望がもても持てなくても、自分のきいただけの話しを、基町と土手の連中だけでもが伝えきくことを、篤子はのぞんだ。日本のどこかにそのような熱情の燃えていることを、不幸な人々にきかせたいのだ。

篤子のあたまのなかを、基町の知人たちと、相生土手の誰彼のよごれた顔が通りすぎた。(30)

楠山弁護士は、「夕風の暑いなか」を「原爆障害者に会つていろいろ」話を聞き、原爆孤児の手紙に涙する。そうした楠山の「情熱の照り返し」は、篤子の心に「歓喜に似たもの」をもたらず。

楠山は、被爆体験者との交流によつて、彼らの情念を集合し、裁判による法の書き換えへと組織化しようと試みている。それは、

篤子が一貫して感じていた「夕風」の「窒息感」「重圧感」を、「熱情」へと書き換えてしまおうかにも見える。だからこそ、篤子は楠山弁護士の話を自分の中にとどめずに、自分がこれまでに出会った、基町と土手の「不幸な人々」に届けたいと思うのだ。多種多様にひかれた差異の線に隔てられ、バラバラでしかありえなかった街と人とを、「復興」の論理とは異なる原理でつなぎ、結びつける。そうした連帯の表象としてこの場面の「夕風」を意味づけることも可能かもしれない<sup>(7)</sup>。だがそれは単純に差異を消去した同一化の論理とは違う。

「篤子のあたまのなかを、基町の知人たちと、相生土手の誰彼のよ、くれた顔が通りすぎた」とき、たとえばそこには、さきほどの「原爆にあつた人らが、自分たちこそは世界中でいちばん残酷な目にあつたような顔をして、いばつてる」と篤子につつかかった、満州からの「引揚の女」の顔も想起されたはずだ。あるいは、朝鮮戦争時に密航し、いまは強制送還におびえ、日本人の妻の兄弟から搾取される日々を暮らす朝鮮人の金の顔もあつたであろう。彼らひとりひとりが篤子と同じように、楠山弁護士の話に共感するとは、保障できるものは誰もいない。むしろここで浮かび上がるのは、安易な折り合いや了解を拒んでやまない、そうした他者の顔や声である。それでも、そのような相手と知って、なお語りかけることに、経験の個別の質を踏まえつつ、さまざまな経験と経験をつなぐ、かすかな「希望」が賭けられている。

「夕風の街」とは、安易な共感に出来事を回収してしまう、そのような物語から排除された存在が、常に侵入しつづける場所なのだ。それは、いつてみれば、不和・不合意の表象ともいえよう。

篤子が「完全な救いではないが、その片鱗」というように、そうした他者の声との係争に身を置き続ける行為こそが、差異を架橋する実践にほかならず、さらにいうとすれば、「希望」もまたそこにしか到来しないのではなからうか。

広島の街を記録する大田洋子の実践は、「戦後」意識をかたちづくる「原爆文学」を生みだすとともに、それ自体を問題化し、別の形へと開いていくひとつの方向を示していたのではなからうか。それは「夕風の街」——「原爆文学」というジャンルそのもの——を、複雑な関係性、錯綜した声のせめぎ合いに充填された記憶と生存の場として、つねにとらえ返すような実践にほかならない。

## 注

- 1 <http://syunorno.net/?p=7775>
- 2 <http://d.hatena.ne.jp/masatosano/20110526#p1>
- 3 初出は「群像」一九五四年一月（一章）、「群像」一九五四年一月（六—一章）、「新日本文学」一九五五年八月（一四—二二章、原題「夕風の街と人」（続）、「群像」一九五五年八月（二四—三〇章、原題「冒瀆」）。なお本稿の『夕風の街と人』からの引用は、『夕風の街と人』（三一書房、一九七八年七月）に依っている。

- 4 『中国新聞』に掲載された「第一次原爆文学論争」関連の文章は以下の通り。小久保均「再び「原爆文学」について」（二月四日）、藤沢国輔「ある朝」と広島文学」（二月五日）、原田英彦「原爆文学とは何か」（二月三日）、斎木寿夫「原爆と原告」（二月三日）、



今田龍夫「『原爆文学』の解釈」（二月一四日）、宮原双声「広島  
の俳句」（二月二四日）、平櫛健二郎「蚕の話」（二月二五日）、久居繁  
「『売り物』『買い物』（二月二五日）、豊田清史「如何に身をつめ  
るか」（二月二六日）、喜連敏生「原爆文学への期待」（二月二六日）、  
池田大江「再び平和を叫ぶもの」（二月二七日）、松原隆良「広い・  
ほんとうに広い道がある」（二月二七日）、新屋章「原爆を文学する  
心」（二月二八日）、深川宗俊「悲しみを耐えて」（三月七日）、福田  
（稲田）美穂子「被害者の意識」（三月一六日）、神田三亀男「ひろ  
しまの歌人」（四月八日）。

5 天瀬裕康「梶山季之の文学空間 ソウル、広島、ハワイ、そして  
人びと」（溪水社、二〇〇九年四月）一二二—一二三頁。

6 岩崎清一郎『広島』の文芸 小説・評論』（広島文化出版社、一九七  
三年一〇月）。

7 ジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く 日本文学と原  
爆』（法政大学出版局、二〇一〇年七月）一三九頁。

8 同書一四一—一四二頁。

9 『夕風の街と人』を切つて捨てる花田の論法は、『新日本文学』  
一九五四年一月号の文芸時評において、当時話題になった小山い  
と子「ダム・サイト」（『中央公論』一九五四年一〇月）を、「水力  
を科学的に利用しようと思案しなければ時代」にふさわしくない、  
「牧歌的」な「少女小説」と断じたのと同型である。鳥羽耕史『1  
950年代 「記録」の時代』（河出書房、二〇一〇年一二月）を  
参照。

10 拙著『原爆文学という問題領域』（創言社、二〇〇八年四月）一二  
五頁。

11 『夕風の街と人』とこの時代のマンガ『夕風の街 桜の国』（双

葉社、二〇〇四年一〇月）との関係については、注10に挙げた拙  
著において論じたことがある。後者が前者を参照しながら、朝鮮人  
部落の痕跡を作品から拭い去った意味を考察したことがある。詳し  
くは拙著を読んでいただきたい。『夕風の街 桜の国』のあとに、  
こうのは、戦時中の呉（と広島）を描いた『この世界の片隅に』（双  
葉社、上・二〇〇八年二月、中・二〇〇八年八月、下・二〇〇九年  
四月）を発表した。このマンガには、八月一五日の玉音放送に納得  
がゆかず、思わず家の外にとびだした主人公の女性が、遠くに掲げ  
られた大極旗をみつめるシーンがある（下巻九四—九五頁）。どこ  
にでもいたような「軍国少女」は、大極旗をみて、「暴力で従えと  
つたという事か／じゃけえ暴力に屈するという事か／それがこの国  
の正体か」と呟くのだ。朝鮮人という他者に向き合い、日本の加害  
の問題を描きこんだのだという評価もあるようだが、私としてはそ  
うした見方にはあまり賛同できない。このシーンの大極旗の扱いは、  
了解しがたい他者の表象というよりは、「軍国少女」のあまりにも  
唐突な戦後の良識への「改心」を引き出すための道具にしかなくなつて  
いない。

12 川村湊「トカトントンとピカドン——「復興」の精神と「占領」  
の記憶——」（岩波講座近代日本の文化史「感情・記憶・戦争」19  
35〜55年 2『岩波書店、二〇〇二年一二月）。

13 二例だけ紹介しておく。

●中国新聞社編『炎の日から20年 広島島の記録2』（未来社、一九  
六六年六月）二四五頁から。

・市の復興計画原案は、二十一年二月から七月にかけて復興審議会の手でまとめられたものだった。そして、丹下助教が新しさをみた「市中央部の大公園」の発案者は浜井信三現市長（当時助役）だった。／彼は昭和十五年、市商工課長時代に中央市場整備の名目で奉天、新京まで出かけ、新京の新しい都市計画に強ひられた。原爆の日、配給課長の彼は被災者へのニギリメシ配給に飛び回った、被爆の混乱から町が一段落した十一月、当時の木原七郎市長から助役になるよう懇請された、ためらった。——中略——／話があつて一カ月も過ぎたろうか、十二月十二日に助役の辞令を手にした。踏み切った気持ちのなかには、原爆という不幸なチャンスではあつたが、この機に古い城下町のなごりを一掃して新しい都市計画を実現したいという夢があつた。／助役であれば発言力も強い。市の機構を再編成し、正月返上で一月八日には復興局を発足させた。二月に東京から着任した長島敏初代復興局長に、浜井助役は「市中央部の大公園と百メートル道路はぜひ実現してほしい」と命じた。

●浜井信三『原爆市長——広島とともに二十年』（朝日新聞社、一九六七年一月）七三頁から。

・木原市長は、市の復興が市の力だけでは手に負えないという実情を見て、半公半民の「復興会社」を設立し、その会社に広島市の復興を委託する構想をもっていた。ちょうど政府が、満鉄をつくって、満州の開発をしたのと同じ構想である。

14 「原爆友の会」は実際の「原爆被害者の会」と対応し、青年のモデルは川手健であろう。川手は、『新日本文学』一九五二年一月

に、「七年後の広島」という文章を発表している。「然し、町を一步横にはずれると、私達は忽ち広島島の復興がどんな畸形的なものかをすぐ感じる事が出来る」「広島をみた人がまず驚くのは道路だ。横市百米の道路といえは、もう道路の様なきがしない。原つばだ。

そこでは毎日、日雇いの人が働いている」「こりやあ、飛行場にするんぢやあ」といつている人がいたが、たしかにこれなら飛行機が発着できる」といったあきらかな「復興」批判の内容である。

15 中野和典「心象風景としての被爆都市——大田洋子『夕風の街と人と——一九五三年の実態——』論」（『原爆文学研究』第四号、二〇〇五年八月）。

16 楠田剛士「一九五三年のルポルタージュ／文学」（『原爆文学研究』第四号、二〇〇五年八月）。

17 ちなみに『夕風の街と人』の連載終了は一九五五年八月。第一回原水爆禁止世界大会が広島で開催された時期であり、原水禁運動の昂揚が大衆的規模の反米ナシヨナリズムへと向かう余地をまだ残していた頃である。

\*本稿は、日本近代文学会6月例会（二〇一一年六月二五日）、特集「戦後文学・トランスナショナル——研究環境・研究方法の前線（四）」における報告内容に、加筆修正したものである。